

經濟論叢

第168卷 第3号

-
- 中国の流通改革.....成 生 達 彦 1
張 洛 霞
- 負債・持分の区分規準の展開と
その理論的含意.....池 田 幸 典 30
- 資本家支配の根拠(1).....坂 本 雅 則 47
- 発展途上国の環境政策と
先進国企業の参入・退出(2).....林 宰 司 66
- ジェームス・ハリントン研究と
J. G. A. ボーコック(1).....竹 澤 祐 丈 80
-

平成13年9月

京都大學經濟學會

ジェームス・ハリントン研究と J.G.A. ポーコック (1)*

——統治組織論と宗教性——

竹 澤 祐 丈

I はじめに

ジェームス・ハリントン (James Harrington, 1611-1677) の思想史上の重要性とその思想の特徴とは、ジョン・ポーコック (John G. A. Pocock) による最も体系的な一連の解釈によって明らかにされてきた¹⁾。ポーコックのハリントン解釈は、相即的な二つの異なるレヴェルの仮説に基づいている。第一の仮説は、ハリントンの同時代において、古典的共和主義 Classical republicanism とマキャヴェッリの思想が多大な知的影響力を持っていたとするものであり、第二のそれは、それらの思想潮流の代表具現者としてハリントンを位置づけるものであった²⁾。ポーコック解釈の継承的研究者の多くは、この二つの仮

* 本稿執筆過程で、Jonathan H. Scott, John Dunn, 田中秀夫, 山田園子, 安武真隆, の各氏から有益なコメントを頂いた。ここに記して感謝したい。

なお本稿は、2001年1月に「ジェームス・ハリントン研究序説」として原稿を提出したが、紀要特有の問題により、一年後に形式上の改訂作業を伴いながら異なる表題の下で発表される。当初本稿とともに「研究序説」を形成していた後半部分は、「ポーコック以降のジェームス・ハリントン研究」として公刊される。従って、本稿において〈別稿〉と表現するのは、この後半部分を指している。併せて参照いただければ幸いである。

- 1) J. G. A. Pocock, 'Historical Introduction', in his edition, *The Political Works of James Harrington* (Cambridge, 1977), pp. 1-152; *idem.*, *The Ancient Constitution and the Feudal Law: a study of English Historical Thought in the seventeenth century: a reissues with a retrospect* (1987 ed., Cambridge, 1987), ch. 6; *idem.*, 'James Harrington and the Good Old Cause: a study of the ideological context of his writings', *Journal of British Studies*, 10 (1970), 38-48; *idem.*, 'Contexts for the study of James Harrington', *Il Pensiero Politico*, 11 (1978), 20-35; *idem.*, 'English Historical Thought in the Age of Harrington and Locke', *Topoi*, 2 (1983), 149-162.
- 2) J. G. A. Pocock, *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition* (Princeton, 1975), esp. pp. 383-400.

説を共に基本的に受け入れたうえで、自らの解釈を展開している。彼らによれば、ポーコックの解釈によってハリントン研究は思想的に信頼に足る解釈へ向けて大きく進展したということになる。

これとは対照的に、ポーコックによって、ハリントンは論争的な位置に置かれたともいわれる。この立場を採る代表的研究者であるコーリン・デーヴィス (Colin J. Davis) とジョナサン・スコット (Jonathan H. Scott) は、ポーコックが描いた思想潮流の存在自体 (ポーコックの第一仮説) を認めつつも、ハリントンを代表具現者とみなす解釈 (第二仮説) に異議を唱える³⁾。かれらによれば、問題を孕んだポーコック自身の思想史方法論とその実践とによって、ハリントン解釈は混乱させられているということになる。

ポーコックと批判的研究者とのハリントン解釈を巡る対立は、究極的には、両者の方法論の相違に由来するのであるが⁴⁾、ここで問題としたいのは、ハリ

3) 第一の仮説に対する批判的見解は、例えば、Markku Peltonen, *Classical humanism and republicanism in English political thought, 1570-1640* (Cambridge, 1995), pp. 1-17 を参照せよ。この著作は、古典的共和主義の17世紀半ばの復活というポーコック解釈への異論を含むものの、ハリントンの思想の分析を直接の主題としていない。また第一の仮説の継承的發展は、例えば、Quentin Skinner, *The Foundations of modern political thought, 2 vols* (Cambridge, 1978); *idem., Liberty before Liberalism* (Cambridge, 1998); Philip Pettit, *Republicanism: a theory of freedom and government* (Oxford, 1997); David Norbrook, *Writing the English Republic: poetry, rhetoric, and politics, 1627-1660* (Cambridge, 1999) を参照せよ。しかし前二者の研究視角は具体例から距離を置く理論的アプローチであって、ハリントンの思想の体系的分析は視野の外にあり、後者は、共和主義的修辭法の展開を跡付けることを目的とすることから、本稿で取り上げるハリントン研究者たちの問題意識とは距離がある。したがって上記の五つの著作について、本稿ではハリントン研究史との関係を指摘するにとどめる。

なおスキナーの議論のもつ歴史研究上の問題点を指摘しているのは、Blair Worden, 'Review: *Liberty before Liberalism*', *London Review of Books*, 5 February 1998, である。

4) 政治言説による歴史研究を提唱し実践しているのは、ポーコック以外にも、クエンティン・スキナー (Quentin Skinner) とジョン・ダン (John Dunn) がいる。彼らの議論の特徴は、例えば、以下の文献を参照せよ。ポーコックに関しては、田中秀夫、「共和主義と啓蒙——思想史の視野から——」, ミネルヴァ書房, 1998年; Iain Hampsher-Monk, 'Review Article: Political Languages in Time—The Works of J. G. A. Pocock', *British Journal of Political Science*, 14 (1994), 89-116, スキナーに関しては、佐々木毅、「政治思想史の方法と解釈——Q. スキナーをめぐる——」, 『国会学会雑誌』, 94巻7・8号, 1981年, 124-142ページ; 半澤孝鷹、「政治思想史研究におけるテキストの自律性の問題——Q. スキナーをめぐる方法論争について——」, 『東京都立大学法学会雑誌』, 29巻1号, 1988年, 37-62ページ; 関川正司, 「コンテクストを閉じるということ——クエンティン・スキナーと政治思想史——」, 『法政研究』(九州大学), 61巻3・4号, 1995年, 203-273ページ, ダンに関しては、半澤孝鷹, 「訳者あとがき」, ジョン・ダン, ノ

ントンの思想の解釈において両者の対立が具体的に何を巡って生じているのかということである。それは、知的伝統の形成に寄与した側面と自らの時代背景に制約されていた側面とをどのように結びつけるかという問題である。

既述のように、ポーコックとその批判者の間にさえ、ハリントンの時代のイングランドに、古典的共和主義とマキャヴェッリの思想の影響とが存在したという認識については決定的な相違がなかった。しかし、ひとたびハリントンと同時代の思想家との関係に焦点を当てるならば、批判者の見解とポーコックのそれとは異なるのである。つまり、デーヴィスがユートピア主義者と、スコットが（古典的ではなく）近世共和主義者とハリントンを解釈していることは、ポーコックが描いた思想潮流とハリントンが無関係だという主張ではなくて、その思想の流れを（ハリントンよりも）よりよく代表する同時代人が存在するのであって、ハリントンの思想の評価を同時代の歴史的・知的文脈のなかでより緻密におこなう必要性を示唆しているのである。

批判者の異議申立ては、具体的にはハリントンの統治組織論に関するポーコックの解釈に向けられている。ポーコックは、ハリントンの統治組織論を単なる非宗教的政体論とは見なさず、その宗教性の発現として解釈する。つまり、ポーコックによれば、ハリントンの統治組織論は〈世俗的に表明された宗教性 secularly articulated religiosity〉⁵⁾として扱われなければならない。しかし、批

、『政治思想の未来』、みすず書房、1983年、225-236ページ；Takamaro Hanzawa, 'The political thought of John Dunn and the Cambridge School', *History of European Ideas*, 19 (1994), 179-183 など。

他方で、彼らの政治言説の思想史に対する直接的な批判的言及は、例えば、以下を参照せよ、J. C. Davis, 'Radicalism in a traditional society: the evaluation of radical thought in the English commonwealth 1649-1660', *History of Political Thought*, 3 (1982), 193-213。

5) 宗教性 religiosity は、本稿における重要な概念の一つであるので、若干の説明をする。宗教性とは、創造主たる神という考え方に由来する価値体系（当然、異教的要素を含む）であり、現世における人間の活動を根底において意味付けるものである。つまりそれは宗教的確信として当人によって自覚されていないものも含み、また、宗教的、神学的表現（例えば聖書注解など）を通して表明されるものに限定されない。したがって、（現代人から見て）神学的な諸前提をもった人間観、政治観、そして社会観の総体という意味で、宗教性という用語を用いる。

ハリントンやその同時代共和主義者たちの宗教性の分析が彼らの思想を理解する上で不可欠であるという認識は、ハリントンに関して異なる見解を示しているにも拘らず、スコットとウォーズ

判者によれば、ポーコックの概念装置は、ハリントンの思想の通時的説明には一定の有効性を持つが、その共時的意義——なぜハリントンは（同時代の他の共和主義者とは異なり）政体論を中核とする統治組織論に議論を集中させていったのか、その前提にはいかなる人間観、政治観、社会観があり、それらが彼の統治組織論にいかなる性格を刻印しているのか、そしてハリントンの議論が同時代的にどのような意味を持っていたのか——を説明するには極めて限定的な有効性しか持たない⁶⁾。したがって、ポーコックの、あるいは批判者の解釈のいずれを支持するにせよ、「ピューリタン革命」と呼ばれてきた同時代の思想的文脈——具体的には、同時代の支配的な言説の一つである「神聖な支配 The Godly Rule」や千年王国主義的思想潮流など⁷⁾——を考えるならば、〈世俗的に表明された宗教性〉というポーコックが用いた概念装置の意義を見極めることから始めなければならない。

そこで本稿は、既にポーコックが適切にも目指したように、ハリントンの思想を理解するためには、その統治組織論と宗教性の特異な結合に関する精緻な分析が不可欠であることを、研究史に即して確認することを目標とする⁸⁾。そのために、まず、統治組織論と宗教性の特異な結合を全く問題とせず、たんに

ンデンによって共有されている。詳細は、別稿で言及する。

また、ハリントン著作集の冒頭に付されたその編者ポーコックの解説に対する書評も参照せよ、
「……ポーコックの説得的な再解釈によって、ハリントンは今やある種の世俗的千年王国主義者 a kind of secular millenarian となった。」(G. E. Aylmer, 'Review of Books', *English Historical Review*, 94 (1979), 132.) 上記の指摘からも、ハリントンの思想を理解するためには、その宗教性の比較分析が必要であることが了解される。

6) ポーコックの枠組みによりながらこの間に解答を与えようとするのは、James Cotton, *James Harrington's political thought and its context* (New York, 1991) である。しかしこの著作もまた、いかなる意味においてハリントンを共和主義者であり、そのことが宗教戦争としての内乱といかなる関係にあるのかというデーヴィスやスコットのポーコック批判には充分応えていない。したがって、この批判を踏まえながらハリントンの議論の同時代における意味を分析することは、本稿の課題として残されている。

7) William M. Lamont, *Godly Rule: Politics and Religion 1603-1660* (1991 ed., Hampshire, 1991); John Morrill, *The Nature of the English Revolution* (London, 1993), part 1; Derek Hirst, 'The Failure of Godly rule in the English republic', *Past & Present*, 132 (1991), 33-66 などを参照せよ。

8) 一つの試みは、拙稿、「ジェームス・ハリントンの『世俗性』と『権威への自由』——二院制構想と『良心の自由』——」、『イギリス哲学研究』, 24号, 2001年, 5-19ページ, である。

なる世俗化=脱宗教化の議論としてハリントンの思想を扱っている点で、ポーコック以前の研究者とポーコック・テーゼの先駆者の議論には問題があることを示す。そしてその議論の背後には、世俗性と宗教性を二項対立的に把握する思考があることを指摘する⁹⁾。次に、ポーコックのハリントン解釈を分析しながら、その中心的議論がその思想における統治組織論と宗教性との特異な連関の分析にあること、従って非宗教化の議論としてハリントンを把握していないことを再確認する。そしてこれを支える分析視角が、〈世俗的に表明された宗教性〉であることを明らかにする。

II ポーコック以前の研究者たち：民主主義者、ジェントリ、ブルジョア

本節で扱う研究者たちの議論で注目すべき点は、彼らの目的が、ハリントンの思想の全体像を素描することではなく、その思想全体における位置づけを分析することなくその思想の一部分に焦点を当てて、ある特定の観念史や知的伝統の流れを跡付けることにあるということである。そのため、ハリントンの統治組織論の特質だけを、民主主義=政治的多数支配の正当化 (H. F. Russell-Smith, G. P. Gooch, A. E. Levett, G. H. Sabine, C. Blitzer)¹⁰⁾、ジェントリ

9) 17世紀イングランドにおいて、世俗性の強調が、現代的なそれとも無神論とも異なっていたという重要な点に、ハリントン研究を含むこれまでの思想史研究が十分な注意を払ってきたとは言えない。当時の無神論や世俗主義の特殊性は、例えば、G. E. Aylmer, 'Unbelief in Seventeenth-Century England', in D. Pennington & K. Thomas eds., *Puritans and Revolutionaries: Essays in Seventeenth Century History Presented to Christopher Hill*, (Oxford, 1978), pp. 2-46; M. Hunter, 'The Problem of "Atheism" in early modern England', *Transactions of the Royal Historical Society*, 5th series, 35 (1985), 135-157; 山田園子, 『イギリス革命とアルミニウス主義』, 聖学院大学出版会, 1997年; 同『千年王国への二つの道』, 田村秀夫編, 『千年王国論—イギリス革命思想の源流』, 研究社, 2000年, 89-111ページなどを参照せよ。

10) H. F. Russell-Smith, *Harrington and his Oceana: a study of a 17th century utopia and its influence in America* (Cambridge, 1914); G. P. Gooch, *English democratic ideas in the seventeenth century* (2nd ed., Cambridge 1927); A. E. Levett, 'James Harrington', in F. J. C. Hearnshaw ed., *The Social & Political Ideas of Some great thinkers of the sixteenth & seventeenth centuries*, (London, 1926), pp. 174-203; George H. Sabine, *A History of Political Theory* (3rd ed., London, 1963), pp. 496-508; Charles Blitzer, *An Immortal Commonwealth: The Political Thought of James Harrington* (New Haven, 1960); 田中浩, 『ホップズ研究序説 (増補改訂版)』, 御茶の水書房, 1994年, 49-104ページ; 同『国家と個人—市民革命から現代まで—』, 岩波書店, 1990年, 57-72ページ; 平野耿, 『「オシアナ」におけるハリントンの政治機構論』, 『東洋大学』

の勃興・没落 (R. H. Tawney, H. R. Trevor-Roper)¹¹⁾、ブルジョア的バイアス (C. Hill, C. B. Macpherson)¹²⁾ との関係で論ずる。結果として、ハリントンの宗教性に関する関心は皆無に近いか、あるいは関心があったとしても統治組織論の従属部分としてしかみなさない。彼らにとってハリントンの宗教性とは、世俗化=脱宗教化の不徹底さの残滓以外のなにもものでもない (世俗性と宗教性との二項対立的把握)。

民主主義者としてハリントンを解釈する第一のグループは、かれの共和主義を現代的な意味での民主主義と同じものと見なし、この民主主義こそが著『オシアナ共和国』の中心的なテーマであるとする。その結果として、ハリントンは議会制と成文憲法の重要性を唱えた理論家として描かれることになる。

〔学部研究報告〕、4号、1968年、27-36ページなど。

英語圏の研究に影響される形で日本のハリントン研究が進展してきたのは否定できない事実であるので、本稿では便宜上、英語圏の研究視角に合わせる形で分類した。しかし邦語による研究は単なる紹介に終始しているだけでなく、無自覚的に新たな論点を加えている場合もある。したがって、邦語文献におけるハリントン解釈の問題点とその特徴は、非常に興味深い重要な問題であると考えられるので別の機会に論じたい。

11) R. H. Tawney, 'The Rise of the Gentry, 1558-1640', *Economic History Review*, 11 (1941), 1-38; *idem.*, 'Harrington's interpretation of his age', *The Proceedings of the British Academy*, XXVII (1941), 199-223; *idem.*, 'The Rise of the Gentry: A Postscript', *Economic History Review*, 2nd series, 7 (1954), 91-97; H. R. Trevor-Roper, *The Gentry 1540-1640* (Cambridge, 1953); 岡村東洋光, 「ハリントンの共和主義」, 『商経論叢』(九州産業大学), 33巻3号, 1993年, 57-84ページなど。

12) Christopher Hill, 'James Harrington and the People', in his *Puritanism and Revolution: studies in Interpretation of the English Revolution of the 17th century* (London, 1958), pp. 299-313; *idem.*, *The Experience of Defeat: Milton and Some Contemporaries* (New ed., London, 1994), pp. 184-199; C. B. Macpherson, *The Political Theory of Possessive Individualism, Hobbes to Locke* (Oxford, 1964), part 4; *idem.*, 'Harrington as Realist: A Rejoinder', *Past & Present*, 24 (1963), 82-85; 浜林正夫, 「ハリントンとイギリス革命」, 『歴史学研究』, 202号, 1956年, 15-24ページ; 同「イギリス革命の経済思想(1)——ジェームズ・ハリントン——」, 『商学討究』(小樽商科大学), 9巻1号, 1958年, 31-52ページ; 同「イギリス革命の思想構造」, 未来社, 1966年, 99-146ページ; 隅田哲司, 「イギリス=ブルジョア革命と地主制——J.ハリントンの『農地法』をめぐって」, 『広島商大論集』, 2巻1号, 1961年, 99-117ページ; 田村秀夫, 「イギリス革命とユートピア」, 創文社, 1975年, 145-171ページ; 淺沼和典, 『ハリントン物語——17世紀共和主義者の数奇な生涯——』, 人間の科学社, 1996年; 同「近世共和主義の源流——ジェームズ・ハリントンの生涯と思想——」, 人間の科学社, 2001年, など。

土地基本法 agrarian law の性格をめぐってマクファーソンに異論を唱えたニューの議論 (J. F. H. New, 'Harrington, A Realist?', *Past & Present*, 24 (1963), 75-81; *idem.*, 'The meaning of Harrington's Agrarian', *Past & Present*, 25, 1963, 94-95.) も併せて参照せよ。

そしてこの延長線上でハリントンの宗教性も論じられるので、それは現代的な政教分離の先駆としてのたんなる非宗教的な世俗主義の表われということになってしまう。したがって、例えば、レヴェットは、クロムウェル体制(教会体制をも含む)を積極的に支えた「正統的な共和主義者 the orthodox republicans」と「思索的共和主義者 the speculative republicans」としてのハリントンを区別しながらも、ハリントンの「国家教会制」を、宗教的寛容とは「両立不可能な理念」と指摘するに留まっており、宗教性に関する分析の必要性は認識されていない¹³⁾。

またブリッツァーは適切にも、ハリントンの思想における統治組織論と宗教性との特異な結合に一旦は注意を払う。世俗 secular という語は、宗教的諸前提の存在を否定しているのではなく、むしろハリントンの世俗性は、「シヴィックな徳に関する政治=宗教的精神 the politico-religious spirit of civic virtue」であると指摘する¹⁴⁾。ところが、ブリッツァーは以上のように指摘するものの、他の研究者と同様に、統治組織論のみの分析に終始してしまう。したがって、宗教性に関しては、宗教的寛容の擁護と、広教主義 Latitudinarianism¹⁵⁾——この語の有効性は、王政復古期以降の社会思想の説明に対してであり、ハリントンの活躍した17世紀前半ではない¹⁶⁾——という評価をするに留まるのである。

このように、ハリントンを民主主義者として解釈する第一のグループは、世俗性と宗教性を二項対立的に把握する現代的二元論を17世紀イングランドに時代錯誤的に適用し、脱宗教化としての世俗化を指向した思想家としてハリントンを解釈することで満足してしまう。

13) Levett, 'James Harrington', p. 179.

14) Blitzer, *An Immortal Commonwealth*, p. 169.

15) *ibid.*, p. 15.

16) 例えば, *The Oxford English Dictionary 2nd ed. on CD-ROM*, Oxford, 1992 の 'Erastianism', 'Erastian' の項; Ronald H. Fritze, 'Latitudinarians', in Ronald H. Fritze & William B. Robison eds., *Historical Dictionary of Stuart England, 1603-1689* (Westport, Connecticut, 1996), pp. 283-284 を参照せよ。

ジェントリの勃興・没落という歴史的な現象の象徴としてハリントンを解釈する第二のグループは、初期近代の経済発展が国制改革に与えた歴史的影響に関するハリントン自身の分析がどのような独創性と客観性とを有していたのかということを中心に議論を展開する。不可避的な帰結として、彼らは、ハリントンの経済変動に関する記述以外の議論に興味を示さず、またそれがハリントンの思想全体の中でいかなる位置を占めるのかということにも注意を払わない。そして、何らかの思想的バイアスと彼らが見なしたものは、すべてその〈ジェントリ性〉に結び付けられる。また宗教性に関しても、十分な分析のないまま、ハリントンは、「宗教的な確信の持つ強い力を習慣的に過小評価する」といわれる¹⁷⁾。そしてこの議論の傾向は、ハリントンをブルジョア思想家として把握する第三のグループにおいて、不適切かつ極端なまでに追求されることになる。

第三のグループは、ハリントンの同時代はブルジョアジーの時代の起点もしくは資本主義的社会の黎明期であって、ハリントンはこの歴史段階によって深く影響を受けた思想家に違いないという彼ら自身的前提から、ハリントンの統治組織論に接近する。彼らによって、ハリントンの思想は、ブルジョア革命や市場社会という概念と、何の躊躇もなく結び付けられて分析される。その結果、ハリントンの統治組織論は、ブルジョアの限定や限界をもつとされ、それは非財産所有者やプロレタリアートを理想的共和国オシアナの市民権から排除していることに現れているということになる。同時に、ハリントンの宗教性もまた、世俗性と宗教性を二項対立的に把握する現代的二元論を分析の前提とするので、十分に分析されないまま、脱宗教化の潮流やブルジョア的道德観・倫理観の形成を助けるものでしかないと思われられる。

以上のように、ポーコック以前の研究者たちは、ハリントンの思想を体系的に分析することに解釈の重点をおかないので、描かれた像は、脱宗教化としての世俗化を推し進める思想家ということになる。この解釈はのちにポーコックによって、かれらの統治組織論解釈や世俗性と宗教性を二項対立的に把握する

17) Tawney, 'Harrington's interpretation of his age', p. 25.

現代的二元論の無批判的適用をも含めて批判を受けることになる。

III ポーコック・テーゼの先駆者たち：共和政体主義者，世俗主義者

ポーコックのハリントン解釈に重要な影響を与えた三人の先駆的研究者であるキャロライン・ロビンズ (Caroline Robbins), ゼラ・フィンク (Zera S. Fink), フェリックス・ラーブ (Felix Raab) のいずれもが、特定の思想の「型 pattern」の復活やその「伝達・継承 transmission」をその主題としていること¹⁸⁾、そしてハリントンの時代が世俗化という歴史の流れにおける転換点であるという認識を有していたということは、偶然の一致ではない。この二つの特徴は、批判や留保、変更を伴いながらもポーコックの議論の枠組み——〈世俗的に表明された宗教性〉——の形成に多大な影響を与えている。そこで、三者の議論を整理しながら、その議論の特徴と問題点を明らかにする必要がある。

ロビンズは、その著「18世紀における共和政体主義者 commonwealthman」の冒頭で、その主題と議論の枠組みとを簡潔に表現している。それは、「チャールズ二世の王政復古から [アメリカ] 十三植民地との戦争までの期間における、イングランド自由思想 Liberal Thought の継承と発展、およびそれを取り巻く状況」を跡付けることであった¹⁹⁾。つまりロビンズの焦点は、ハリントンの生きた17世紀イングランドではなく、それ以降の18世紀の、しかも、アメリカ植民州に置かれている。そのことから、ハリントンや「17世紀の共和政体主義者たち commonwealthmen」に関しては、18世紀アメリカの思想状況から遡及的に議論が展開されることになる。その弊害のひとつは、彼女が、共和主義者 republican だけではなく、現代的な意味での自由主義者 liberal や民主主義者 democrat を、前者と区別することなく、「共和政体主義者

18) Zera S. Fink, *The Classical Republicans: an essay in the recovery of a pattern of thought in seventeenth century England* (2nd ed., Evanston, 1962), title page.

19) Caroline Robbins, *The Eighteenth-Century Commonwealthman: studies in the transmission, development and circumstance of English liberal thought from the Restoration of Charles II until the war with the thirteen colonies* (Cambridge, Mass., 1959), title page.

commonwealthman」の語の下に一括していることである²⁰⁾。したがって、現代社会への共和主義思想の貢献内容を議論する際にも、「抵抗権」²¹⁾や「後のイングランド政党制の誕生に促進的な世論を醸成」²²⁾したことを指摘するに留まるのである。同様な議論の展開によって、ロビンズは、17世紀共和主義者の「反聖職者主義 anti-clericalism や自由思想 free-thinking」²³⁾、そして「合理主義 rationalism, ……懐疑主義 skepticism」²⁴⁾を指摘する。しかし、彼女は、ハリントンや他の同時代共和主義者にとって、政治的自由の主張と宗教的自由の主張とが盾の両面であったという事実²⁵⁾や、革命期の国教会体制の変容に十分な注意を払っていない²⁶⁾。結果として、彼女の議論においては、ハリントンよりも、共和主義的理念と自然法理論を併用したといわれるヘンリー・ネヴィル (Henry Neville, 1620-1694) のほうに議論の焦点が置かれ、その反面で、宗教的急進派としばしば分類される同時代の共和主義者サー・ヘンリー・ヴェイン

20) 本稿では、宗教戦争としてのイングランド革命の問題を真摯に受け止め、平和と安定の回復のための処方箋を古典古代に求めた思想家群を、共和主義者 republican とし、他方で、非宗教的な政体論の議論が中心を占める18世紀以降の思想家群を、共和政体主義者 commonwealthman と暫定的に訳語を当てて区別をつける。したがって、ハリントンの思想的特徴をよりすぐれて表現すると思われるのは、ここで述べた含意を持つ共和主義者である。イングランドの思想潮流における両者の概念把握に関する困難については、例えば、John Morrill, 'The Nature of the English Revolution,' in his *The Nature of English Revolution*, pp. 22-25; 今井宏, 「コモンウェルスについて」, 『イギリス史研究』, 2号, 1968年, 1-9ページ; 同「イギリスにおける『共和政』について」, 『紀要』(東京女子大学付属比較文化研究所), 51号, 1990年, 1-16ページ, を参照せよ。

また君主政との関係も上記の概念を分別する重要な指標である。ハリントンの『オシアナ共和国』での君主政批判が、君主政一般ではなく、クロムウェルのプロテクター制に対する批判であったことは、例えば、Andrew Sharp, 'The manuscript version of James Harrington's *Oceana*,' *Historical Journal*, 16 (1973), 227-239 を参照せよ。

21) Caroline Robbins, 'The English Republicans,' in her edition, *Two Republican Tracts* (Cambridge, 1969), p. 43.

22) *ibid.*, p. 44.

23) *ibid.*, p. 49.

24) Robbins, *Commonwealthman*, p. 12.

25) 詳細は、別稿で分析するブレアー・ウォーデン (Blair Worden) の議論を参照せよ。

26) 例えば、John Spurr, *The Restoration Church of England, 1649-1689* (New Haven, 1991), ch. 1; Isabel Rivers, *Reason, Grace, and Sentiment: a study of the language of religion and ethics in England, 1660-1780*, Vol. 1 (Cambridge, 1991); Neil Lettinga, 'Covenant Theology Turned Upside Down: Henry Hammond and Caroline Anglican Moralism: 1643-1660,' *Sixteenth Century Journal*, 24 (1993), 653-669 を参照せよ。

(Sir Henry Vane, 1613-1662) は登場しない。なぜならば、前者はロビンズの議論の目的に最も適した対象であり、後者は最も適さない対象だからである。したがって、ロビンズにおいては、ハリントンとその同時代共和主義者は、フリッターの問題点と同様に²⁷⁾、広教主義者 Latitudinarian という分類以上の名辞を与えられることはない。

フィンクは、十分に展開してはいないものの、ポーコックが後に継承する議論の枠組みと視点とを提供している。フィンクは、ハリントンが「混合統治形態 mixed government」に関する古典古代の理論を批判的に継承したと見なす²⁸⁾。つまり、その理論の盲目的受容ではなく、ハリントンは、その構想を、精巧にし、洗練や変更を加えたのである²⁹⁾。その変更は、次の三点に集約できるとされる。第一は、「混合統治形態における貴族主義的、民主主義的要素の役割分担」であり、このことがハリントンに可能としたものは、ゴシック・バランス³⁰⁾、自然的貴族政による職務分担³¹⁾、ジェントルマンによる政治・軍事両面における特異な役割分担、そして民衆統治 popular government³²⁾に関する定義を明確化することである。第二の変更点は、その「道徳主義的な諸要素 moralistic elements」に見出すことができる³³⁾。フィンクは、国制上の腐敗を、「情念による理性支配の篡奪という人間内部の自然的傾向」と併置するハリントンの類推的議論が可能としたものは、「自然的諸悪を克服する統治組織」を設計することが不可欠だという認識であった³⁴⁾。以上によって、フィンクによれば、ハリントンは、「たやすく変更されない基本法の必要性」を明らかにすることができ、また同時に、「『聖徒』による支配を渴望した同時代の熱狂から自分自身を完全に無縁とする」ことが

27) 脚注17)を参照せよ。

28) Fink, *Classical Republicans*, p. 55.

29) *ibid.*, p. 57.

30) *ibid.*

31) *ibid.*, p. 58.

32) *ibid.*, p. 60.

33) *ibid.*

34) *ibid.*, p. 61.

できた³⁵⁾。最後に、第三の変更点は、完全、平等、かつ不死の共和国を設立することができるというハリントンの主張に見出すことが出来る。これこそが、フィンクによれば、『『オシアナ』全体を根底で支え動機づけている壮大な理念』なのである³⁶⁾。かくしてハリントンは、「自然的悪を克服」することが可能な統治機構を設計することを目論んだと解釈される。

ところが、フィンクは、自然的諸悪の克服をハリントンが目的とした理由に関して明快な解釈を与えていない。また、若干の共通点を認めながらも、ハリントンと同時代のピューリタン³⁷⁾とが根本的に相容れないことを強調する。そうであるならば、宗教戦争としての内乱期に、ハリントンが統治組織論に議論を集中させた理由を、古典古代の理論様式に従ったというだけでは不十分であって、(ピューリタンとの比較を含みながら) 宗教性との関連を分析する必要があるのではないか。

ポーコックのハリントン論の枠組み形成に寄与した先駆者のなかで、本節で分析する最後の人物は、ラーブである。ラーブは、脱宗教化の過程——「政治の領域から神 [の重要性] を取り除くこと」——における重要な思想家としてハリントンを描く³⁸⁾。この解釈を支えるために、ラーブは、まず、ハリントンのマキヤヴェッリやホップズへの評価の揺れ(称賛と批判)の理由を問い、次に、「17世紀中葉におけるイングランドの世俗的政治思想の諸類型 the pattern of English secular political thought」における三者の位置づけに言及する³⁹⁾。

35) *ibid.*, p. 62.

36) *ibid.*

37) フィンクは、ピューリタンを、イングランド革命期の宗教的情熱に駆られた議会派の人々を指すものとして使用している。その認識の根底には、ピューリタニズム対国教会というかつては類繁に用いられた単純な二項対立的把握があるように思われる。近年の歴史学では、この素朴な二元論の弊害や、ピューリタンの語の概念規定の難しさを強調し、その安易な使用を控える傾向にある(例えば、John Spurr, *English Puritanism 1603-1689* (London, 1998); Patrick Collinson, 'A Comments: Concerning the Name of Puritan', *Journal of Ecclesiastical History*, 31 (1980), 483-488)。この点においても、ハリントンの思想の評価を、近年の歴史学の動向を踏まえて、再分析する意義があるのである。

38) Felix Raab, *The English face of Machiavelli: a changing interpretation 1500-1700* (London, 1964), p. 204.

39) *ibid.*, p. 187.

ラーブによれば、ハリントンのマキャヴェッリ称賛は、その「共和主義的助言者兼代弁者」としての側面に対してであり、他方で、その批判は、政治的安定性へのマキャヴェッリの無関心に向けられている⁴⁰⁾。つまり、ハリントンのマキャヴェッリ批判は、政治的安定を確保する要点として財産の均衡理論を認識することに明確に失敗した点に対してであった。マキャヴェッリは、「統治上の成功や失敗の決定因は、善悪の行為ではなく、土地所有の現在の配分状況にあることを認識しなかった」点で、間違っていたのである⁴¹⁾。

では、ハリントンによるホッブズ批判は後者の何に向けられていたのであろうか。ラーブによれば、それは次の二点に集約される。第一に、ホッブズの反共和主義的姿勢と絶対君主政に好意的な立論⁴²⁾、第二に、政治的行為やその制度設計を、過去や現在における歴史的現実性に関する考察の上に基礎付けなかった点に対する批判であった⁴³⁾。つまり、共和主義者として、ハリントンはホッブズの反共和主義的政治学に対立し、マキャヴェッリ主義者として、歴史の探求とは離れたところに究極の政治原理を見出そうとする彼の問題設定と方法論とに反発したのである。しかし両者の共通点も存在するのであって、彼らは共に、「マキャヴェッリが指し示すことが出来なかった……政治における安定性」と⁴⁴⁾、「合理性reasonの上に自分自身の政治科学を設立すること」とを望んでいた⁴⁵⁾。

とはいえ、共和主義者でありマキャヴェッリ主義者であるハリントンと、絶対主権の理論家であるホッブズとの間には大きなへだたりがある。それは、ハリントンがホッブズの「絶対主権 [論] と政治に関する完全に非歴史的方法論とのいずれをも飲み干すことが出来なかった」という点である⁴⁶⁾。しかし、

40) *ibid.*, p. 188.

41) *ibid.*, p. 191.

42) *ibid.*, p. 192.

43) *ibid.*, p. 195.

44) *ibid.*, p. 196.

45) *ibid.*, p. 197.

46) *ibid.*, p. 198.

「直接的観察に基礎をおく解剖学の提唱者」であったウィリアム・ハーヴェイ (William Harvey, 1578-1657) の存在が、「ハリントンの目には、マキャヴェッリとホッブズとの架橋を可能とるように見えたのである。マキャヴェッリと同様に、ハーヴェイは自身の研究方法を観察に基礎付けていたうえに、ホッブズ同様、その方法論は科学的に間違いがなかったので導かれる結果は確実であった。」⁴⁷⁾ こうして、ハリントンは、ホッブズの政治的原理に相当するものとして、「均衡の理論」を練り上げ、それによって「イングランド史から、彼の政治的整合性に合致した共和主義的現実性と必要性とを演繹すること」ができたのであった⁴⁸⁾。

他方で、ラーブは、ハリントンの宗教的諸前提を、内実の乏しいもの、つまりその統治組織論においては従属的要素にしか過ぎないものと見なす。「ハリントンは、大多数の同時代人が思考する際に用いていた術語を無視することが出来なかった。したがって、彼は、苦痛を感じながらも、彼の改革案が神の承認の印を帯びていると大袈裟に言うことで自分の読者を説得するのである。」⁴⁹⁾ ラーブによれば、ハリントンの議論の展開は、歴史と政治に関する完全に世俗的な分析であって、彼の「均衡の理論」でさえも、同時代人が好んで用いた宗教的かつ精神主義的説得方法とは対照的な、非宗教的・世俗主義的な働きしか持たないものであった。ハリントンの思想において宗教的諸前提が二義的でしかなかったことは、同時代の共和主義者や非共和主義者の彼への反応によっても裏書きされるとラーブは言明する。共和主義者ヴェインは、『「平等な共和国」』に関して著述するハリントンの目的やその方法の基本事項にさえ同意を与えながらも、その計画が精神的な内容 *spiritual content* を全面的に欠如していることには憂慮を示し、論争的な国教徒リチャード・バクスター (Richard Baxter, 1615-1691)、第五王国派ジョン・ロジャーズ (John Rogers, 1627-

47) *ibid.*, p. 200.

48) *ibid.*, p. 203.

49) *ibid.*, p. 204. なお、強調は引用者による。

50) *ibid.*, p. 209.

1670), そしてマシュー・レン (Mathew Wren, 1585-1667) も, ハリントンの精神的, 宗教的要素の欠如を, それぞれの立場から, 批判, 称賛, 懐疑したのであった⁵¹⁾。

しかしラーヴの分析は, マキャヴェッリが神なき政治世界の伝統的な象徴として次第に17世紀イングランドにおいて使われなくなっていく過程, つまり脱宗教化の過程を点描するために, 上記の思想家たちに言及するに過ぎない。ハリントンの宗教性はこの解釈目的のための分析されるので, 当然ながら, 綿密な分析はおこなわれていない。

世俗性の強調と宗教性の存在とを二項対立的に扱う議論を展開するロビンズ, フィンク, ラーブの解釈の枠組みは, J. G. A. ポーコックのハリントン解釈において, 大胆に読み替えられていく。

(つづく)

51) *ibid.*, pp. 209-213.